
皇位継承者アドル＝クリスティンと赤毛の冒険家ルーク・フォン・ファブレ

殲滅天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

皇位継承者アドル・クリスティンと赤毛の冒険家ルーク・フォン・ファブレ

【Nコード】

N9360S

【作者名】

殲滅天使

【あらすじ】

『テイルズオブ』シリーズ（おもにアビス）と、『イス？』の超無理矢理コラボ！… 勇気のある人は読むといいさ…

序（前書き）

とりあえずキャラ入れ替えの説明。
今のところ分かってるのを書いたけど、まだ増える可能性あり。
書いてないキャラは入れ替えなしのキャラ。

『テイルズオブ』シリーズの世界
ルーク アドル

ガイ ドギ

ティア（グランツ） ティア（ティアルナ）
ナタリア アイシャ
アツシュ ガツシュ
ヴァン サイアス

『イース?』の世界
アドル ルーク

ドギ ガイ

ティア（ティアルナ） ティア（グランツ）
アイシャ ナタリア
ガツシュ アツシュ
サイアス リグレット
ラウド ゼロス

ガツシュの精霊たち マオ、ヴェイグ、ジーニアス

超無理矢理だけど、読んでくれると嬉しいな

序

この小説は、「イースVIEE」と「テイルズオブ」シリーズ（主にアビス？）を無理やり組み合わせたものです（-|-;-）

こういうのが苦手な方は読まない方がいいと思いますよ。

まだ見ている方は、覚悟ができた方だけですな？
やめておくなら今のうちですよ？

それでは、今度こそ行きます

「ふわ〜…」

赤毛の冒険家、アドル＝クリスティンは、いつもと同じように目覚めた。

しかし何かがおかしい。直感的にそう思ったアドルは、窓から外を見た。

「…!？」
アルタゴに行くために船旅をしていたのだから、外の景色は海以外にはあり得ない。そもそも、船には窓などないはずだ。

さらに、自分の服まで変わっている。

下は黒いズボン、そして服は白く膝まで届く長さで半袖、その服の下にも黒の半袖を着ている。

そこまではいいが。

「どうしては、は、腹が…」

そう、その服は、腹が出る形だったのだ。

「あああどうしよう…こんなのドギに見られたら…笑われるよー」

その時、部屋のドアが大きな音を立てて開いた。

「あつはつは！アドル、もう遅いぜ。…腹出し服も意外に似合うじやねえか」

「え、本当…？ああよかつたよ…。…ん？よく見ると、ドギも服変じゃないか。それに、なんか痩せたかい？しかも、剣なんか持ってどうしたんだい？」

ドギと言われた青毛の青年は、ワイシャツに山吹のような色のベストを着て、茶色のグローブを着けている。そしてスラックスを穿いていて、腰から剣を下げている。そんな彼の武器は拳なので、剣を下げる必要はない。

「おお、そうなんだ。似合うか？」

「似合わないと思うな」

ドギが落ち込んだのは、言うまでもない。

その時、ドアがノックされた。

「ルーク、ガイー。朝からうるさいですよー」

ドアが開き、二人が知らない男が顔を出した。背中まである栗毛、

銀縁メガネで軍服を着ている。

アドルとドギは顔を見合わせた。

「ルーク…?」

「ガイ…?」

『誰のことだい(だ)?』

その男は、二人の呟きに気づかないようで、

「おや?ルーク、いつ髪を切ったんです?それにガイも、髪を青くしちゃいましたか!。ぶっちゃけ、似合っていないでしょ?」

ドギがさらに落ち込んだのは…言うまでもない。

「あの…僕はルークじゃなくて、アドル…クリスティンっていうんだ。そして、こっちの青毛なのは僕の相棒ドギ」

アドルは、自分たちのことを説明し始めた。軍服の男が、誤解しているようだったから。

「そうだったんですか、これは失礼。しかし、どうしてルークやガイの服を着ているんでしょうね…ん?あなたたちは、昨夜まで何をしていたんです?というか、どこから来ました?」

アドルたちは昨夜まで、アルタゴ目指して船旅をしていたことを話した。

「アルタゴ…聞いたことのない地名ですね…。…。まさか…、いえ、もしかするとあるかもしれませぬね!」

「あ…僕たちにも分かるように説明してくれないかい?」

アドルが言うと、男は物思いにふけるのをやめ、

「これは失礼。実は、私の世界には、新月の日に、異世界とつながるだろう、という言い伝えがあるんですよ。…。申し遅れましたが、私、ジェイド・カーティスという者です」

男、ジェイドはようやく自分の名前を告げた。

それからしばらく、アドル、ドギ、ジェイドは自分たちの世界についてなど話し込み、最終的に。

「お二方とも、剣術：ああ、ドギは拳ですね…に優れているようですので、私たちの旅についてきてください。もしかすると、二人が戻る方法も見つかるかもしれなですし」

『うわ、適当だな』

「何か言いましたー？」

『いえ、何も』

こうして、アドルたちはともに旅に出ることになった。

序？

「ふわ〜…シグルーン、朝ごはんできた？」

「んー…マヤ、おはよう…」

『…………あれ？』

アドルたちがジエイドと旅することを決めたその頃、他の部屋でも何かが起きていた。

「…はっ！貴女は、もしかして…公女アイシャさまですか…!?!？」
アイシャと呼ばれた少女は、驚いて目の前の少女の顔を見る。

「ええ、そうよ。あなたはもしかして、街で花を売っている…?」

「ティアです。覚えていてくださっただんですね」

「だって、あなたこの前ラウドに絡まれていたから。そんなことよ
り…不思議な服ね」

「え…?きやあっ！何これ！」

ティアは驚いて自分の服を見た。いつものワンピースにストール
…では無く、大きく立っている襟のついた茶色の長いワンピースの
ような服（裾の方が花のように大きく裂けたデザインだ）に、これ
また茶色のブーツに二の腕まである手甲といった出で立ちだ。

そんなティアの格好を見てアイシャは。

「…………なんで同じくらいの年の子と、こんなに胸の大きさが違うの
よーっ！何よ、この大きさ！不平等じゃないっ！」

「…え？」

そんなアイシャは、白と明るいミントグリーンの服を着て、黄色
のタイをつけている。下は、裾を折ったショールパン、白のブーツだ。
頭には、茶色のヘアバンドがついている。

「ほら、あたしのなんか、見なさいよ〜…。バストの部分がけっこ
う余るのー！」

「こ、公女さま！何をおっしゃるんですか！」
「…あつ。シグルーンに聞かれたら怒られるじゃない…」
「いや、ツインテールにヘアバンドの方がおかしいかと…」
「そっちなの！？…あ、そうだティア。その…敬語なんかやめてよね。きつと、何かの縁でこうやって一緒になっただからさ」
「ですが…いえ、それもそうですね」
「ほら、敬語出た」
「あつ…その、よろしくね、アイシャ…ちゃん」
「『アイシャちゃん』かあ…まあ、しばらくはそれで許してあげるわ」

アイシャが言ったその時、部屋のドアが音を立てた。

「ティアー、ナタリアー。そろそろ朝食ですよー」

『……………ナタリア？』

その言葉の後、一人の男 ジェイドが入って来た。

「…おや。貴女方、ティアとナタリアではありませんね？どこのどなたですか？」

ティアとアイシャは、自分たちについて説明した。

「わたしはティアですが…貴方の言うティアさんとは別人だと思います」

「あたしはアイシャよ。二人ともアルタゴ公国のアルタゴ市に住んでるわ」

「なるほど、アルタゴですか…アドル、ドギの目的地じゃないですか」

「アドルに…ドギですって！？」

アイシャは驚いて言った。

「その二人って…」

「『赤毛のアドル』と、『壁碎きのドギ』よ！！」

「あの二人、貴女方の世界では、かなりの有名人だったんですか」

「あの二人…？」

「あたしたちの世界…?」

「おーい、ジェイド。何やってんだ?」

ティアとアイシャが不思議がっている、もう一人、男がやって来た。ドギだ。

「ドギ。この剣ちゃんと持っててくれよー!部屋が散らかって困ってるんだよ」

もう一人来た。こちらは、アドルだ。

「あ、あ、あ、アドル!クリSTEIN!」

「え…僕のことを知ってるのかい?確かに、僕はアドル!クリSTEINだけど…。君たちは?」

「あたしは、アイシャ・サリ…じゃなくて、ただのアイシャよ。アルタゴに住んでいるわ」

「ティアです。あの、あなたがアドルさんということは、そちらの青毛の大きな方は…《壁砕きのドギ》さんですか?」

ドギは笑って答えた。

「そうだけ。コイツの…アドルの相棒だ」

「なるほど。つまり、アイシャとティアもアドルやドギと同じ世界から飛ばされたんですね。となると…」

「僕たちの代わりに、もともとこの世界にいた人たちが、僕たちの世界に飛ばされたんだね」

「察しがよくて助かります。残りの方は、思い付か」

「し、失礼ね!!あたしだってちよつとは思いついたわよ!!」

ジェイドの発言に、アイシャは反論した。ちなみに、残り三人は苦笑した。

「それは失礼。…ああ、そうだ。私たちの旅についてきませんか?あなた方の世界に戻る方法も分かるかもしれないし、私としても人手がほしいですから」

「だったら…」

「行きます」

「ううして、アイシャとティアアもジエイドにうして行く」となっ
た。

「ああ、あの男と一緒になのか…」

序？（前書き）

イースの世界の舞台は？の舞台・アルタゴ公国、テイルズの世界の舞台はテイルズオブバーサスの舞台・ダイランティアです。

序？

アドルたちが別世界に飛ばされた頃、別の者たちもまた飛ばされた。

「ルーク、起きろー！」

「…うるせえな、俺はまだ眠いんだよ……」

「ヴァンとの稽古はいいのか？」

「……！！！」

ルークと呼ばれた少年は、あわてて起きた。

「ガイか…って、なんだ、その格好」

「いや、ルークの格好も変だろ」

「……は？」

ルークとガイは、それぞれ自分の服を見た。昨夜、寝る前まで着ていた服とは違う服を着ている。ルークは普段着ていない銀の鎧（銀色に限らず、普段から着ていないが）を着ているし、ガイもタンクトップにズボンといういつもよりかなりラフなかつこうになっている。

「何だ、これ…どうなってんだよ!?!」

「……！！！」

ガイは何か気付いたのか、突然部屋を飛び出した。

「なっ、おい、ガイ!?!」

ルークも部屋を飛び出した。

「これは……どうなってんだ…?」

ガイは部屋を飛び出して周りの様子を確認した。そうしていると、甲板に出た。辺り一面海だ。しかし、昨晚街の宿に泊まったため、こんなところにいるはずがない。

「……!? な、なんで海なんだあ!? おい、ガイ!!! 昨日、俺達、宿に泊まったよな!？」

「……確かに、宿に泊まったよな…ジエイドの旦那が、俺達をわざわざ海に運ぶなんてめんどくさいことをするはずがないし……」
「じゃあ、なんでこんな所にいるんだよ!？」

「アドル、ドギ。朝からうるせえぞ」

その時、船の中から男が出て来た。

「アドル? ドギ? 誰だ? 俺はフアブレ公じゃ」

「ルーク!!!」

ガイが、名乗ろうとしたルークを極力小さくした声で止める。

二人はひそひそ声で話し始める。

「なんだよ!!!」

「いちいち『公爵の息子』とか名乗るな!!! もし命を狙われでもしたらどうする!」

「うっ……わ、わーっ たよ!!!」

「何話してんだ? ……って、おめえらよく見たら、アドルとドギじゃねえな。どこのどいつだ?」

「な!!!」

「……ルーク」

何か文句を言おうとしたルークを遮り、ガイは説明を始めた。
しかし。

「俺はガイ・セシル、こいつはルーク・フォン・フアブレだ。俺たちは、ニーズホッグにある街の宿に泊まったはずなんだが…」

「ニーズホッグ? そりゃ、地名か?」

「ああ、地名だ。ダイランティアの…」

「ダイランティア? 何だそりゃ?」

「?????」

全く話が通じない。

「…じゃあ、ここは……？」

「ここはメドー海の……アルタゴ公国付近の沖だな。お前ら……じゃねえ、アドルとドギって奴がそこに行こうとしてたんだ。そういや、あいつらどこに行っただんだ？」

そう言っつて、男は中に戻った。

ここまでの状況を説明しよう。

昨日までダイランティアの四大国の一つ、新帝国ニーズホッグにある街の宿に泊まったルーク達。ルークとガイ以外にも、ティアやジエイド、アニス、アッシュなどといった仲間がいたはずだが、どこに行っただのだろうか。

そして、今朝起きてみると、街の宿（陸上）にいたはずのルーク達は海上の船にいることに気付き、今に至る。

「……うーん、これはもしかして……いや、あり得るな……」

「おい、どうしたんだ？」

「ルーク、昨日、月は出てたか？」

「何言っつてんだ？昨日は新月だったじゃねえか」

ガイは、ルークの言葉を聞いて、自分の推測に確信を持った。

「やっぱりか……」

「なんなんだよ、新月がどうしたんだよ？」

「新月の夜に別の世界につながることもある。……っつて言い伝え、聞いたことないか？」

「あるに決まっつて……っつて、嘘だろ！？こっちも昨日新月だったのか!？」

「お前ら、何をまた二人で……。そういや、さっき言っつのを忘れてたが…俺はラドック、海賊だ」

中から、男…ラドックが再び出て来た。

「海賊!？俺はそんな汚い奴らと一緒に乗っつてたのか!？」

「嫌なら降りるか？周りは海だから、ついでに体も洗えるぞ」

「な……………」

「ルーク、頼むから余計なことを言わないでくれ…………で、ラドック。一つ聞きたいことがあるんだが、いいか？」

「ガイは、昨日新月だったかどうか聞いた。こちら…アルタゴも新月だったようだ。」

「うわあ、やっぱりか…………。こっちは、新月に関する言い伝えがあるのか？」

「ラドックは、『どこかの世界と新月が重なった日、“訪問者”が来る』というのを話してくれた。」

「ということは…………こっちの世界の“訪問者”が俺達ってことになるのか。そういえば、探してた奴はいたのか？」

「いや、いなかった。船から降りた…………てことは、あり得ないしなあ……………」

「……………そいつらが、俺達の代わりにダイランティアに行ったんじゃないかねえの？」

「しばらく、ただ聞いているだけだったルークが口をはさんだ。」

「！そうか、あいつらとお前らが入れ替わったのか……………」

「ルークは黙って聞いているだけだったのがイヤで口をはさんでみたのだが、その適当に言ってみた一言がラドックを納得させたらしい。」

「やっぱりそうだったか。ありがとよ、ルーク。お前のおかげでこの謎が解けたよ」

「なっ、べっ、別に、お前の疑問を解決するために言ったんじゃないやねえぞ…！適当に言ってみただけだ、そこんとこ勘違いすんじゃないやねえ……………」

「そう言つと、ルークは船の中に戻ってしまった。」

「…ありゃ、何だ？」

「ただの照れ隠しだな。まったく、アイツも素直じゃないな」

「ああ、なるほどな」

そんな話をしていると、船の中に戻ったはずのルークが再び出て来た。

「……ガイ！部屋の位置どこだ！？」

ルークは、船の中で迷子になったようだ。

それから1、2時間すると、船はアルタゴに着いた。

序？（後書き）

次回から、アドル&ドギ、ルーク&ガイそれぞれの冒険が始まります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9360s/>

皇位継承者アドル＝クリスティンと赤毛の冒険家ルーク・フォン・ファブレ

2011年10月13日08時09分発行